

## 幕末の医師 中川昌沢

なかがわしやうたく

文化11年（1812年）に、薬種（薬の材料）の価格騰貴への対策を求めた願書が、御笠郡の医師15人から出されました。この医師たちの中に中川養泰の名前を見ることができません。中川家は代々御笠郡で医師を務めて来た家で、幕末の当主は中川昌沢という人物でした。

昌沢は、寛政9年（1797年）秋月に生まれ、当初は亀井南冥の息子の亀井雲来に学び、次に南冥の弟子で甘棠館（福岡藩の藩校）の教授を務めた江上苓洲に学びました。医学については、福岡藩に仕えた本道医（内科医）の上村尚庵に学び、27歳の時には京都に遊学して、漢方医学の一つである古方派を川越氏から学んだとされています。そして、遊学を終えた昌沢は、太宰府に戻り医師としての活動を開始したのでした。

その活動の一端を見てみましょう。昌沢の医療活動に関する記録は、安政2〜6年（1855〜59年）にかけて、村々の産子養育を担当した「養育方」の史料（大賀文書）に多くみられます。昌沢は宰府村の人びとの「掛医」とされており、宰府村の担当医であったことが分かります。特に出産にかかわる記事が数多く見られ、産科医として活躍していたことがうかがえます。

### 太宰府人物志

資料室だより ⑤

また、安政2年には延寿王院から福岡藩に対して、昌沢は延寿王院の医師として代々医業に励んできたので、一山中（天満宮の社家中）の種痘を行うことの願いが出されています（黒田家文書「秘記寺社御用帳」）。この願いは許可が下りたようで、「一山記録」という延寿王院の記録には、「一山中種痘之医、今般当院判元中川昌沢江被仰附候」とあり、昌沢は種痘の医師に任命されています。

このように太宰府地域の医療に尽力した昌沢は、明治3年（1870年）に74歳でその生涯を閉じたのでした。そして、昌沢の活動は現在の太宰府地域の医療へと引き継がれていくこととなります。

今回紹介した史料の一部は、「太宰府市市史資料室」で閲覧することができます。このような身近な人びとの営みを通して、太宰府の歴史をひもといてみると、太宰府の新たな魅力を発見できるかもしれません。

太宰府市市史資料室 矢野健太郎



中川昌沢像